

令和七年度

麗澤瑞浪に学んで



麗澤瑞浪中学・高等学校
Reitaku Mizunami Junior and Senior High School

発刊にあたって

校長 藤田 知則

この度、『令和七年度 麗澤瑞浪に学んで』を発刊する運びとなりました。

本書は、毎年六月に行われる「伝統の日感謝の集い」での発表原稿をはじめ、中学から高校のすべての生徒寮で開催される体験発表会、高校二年生の修学旅行感想文、高校三年生による「麗澤瑞浪に学んで」など、生徒たちの学びと成長の記録をまとめたものです。

近年、若者がSNSを通じて犯罪に巻き込まれたり、想像力の欠如からいじめやトラブルに発展する事案が増えています。背景には、「今」「ここ」「自分さえよければ」といった価値観が見え隠れしますが、それは子どもたち自身の責任ではなく、社会や教育、家庭環境の影響によるものであり、大人の側の責任と捉えるべきだと感じています。

だからこそ今、他者と関わる中で育まれる「思いやり」や「感謝」、そして「自分の役割に気づく力」を養う教育の重要性が増しています。個の尊重と同時に、社会の中で生きる力を育てることが、私たち大人の責務だと考えます。

本校は昭和三十五年に全寮制の学校として創立され、現在も多くの生徒が寮生活を送っています。地元や家庭を離れ、多様な仲間と共に暮らす経験は、社会性や道徳性を育む上で貴重な学びの場となっています。葛藤や不便さの中でこそ育まれる「自己有用感」は、やがて社会の中で自らの力を発揮したいという意欲へとつながっていきます。

このような時代だからこそ、国家や社会の発展、そして人々の安心・平和・幸福の実現に寄与できる人物の育成が、今まで以上に求められていると強く感じています。本書に込められた生徒たちの言葉を通じて、その可能性

や成長の軌跡を感じ取っていただければ幸いです。

第二部 伝統の日 感謝の集い

繋げていく想い

2年 箕輪 桃

礼儀や思いやりの心を大切にすること、それは多くの人が意識していることでしょう。ではなぜ、私たちはこれは良いけれど、これはだめなどという善悪の判断をする道徳観を持っているのでしょうか。それは、昔の人たちがどうしたら平和は作れるかを考えて、それを後世に受け継いでくれたからだと思います。

五一三年、これは儒教が日本に伝わったとされる頃で、今から約一五〇〇年も前の話です。儒教とは、中国の孔子が道徳を重視し、社会の安定を目的として提唱したものです。こう聞くと、難しくて理解しにくいと思います。

しかし、この儒教の内容は、いたって簡単なことであり、私たちの人間関係を支える基本のことです。儒教では、人間が守るべき五つのことが説かれています。「人を思いやること」「損得で動くのではなく、自分のするべきことをすること」「上下関係を守り、礼儀を持つこと」「善悪を区別できる知恵を持つこと」「信頼されるような人になること」、この五つです。難しいどころか、いつも私たちが大切に行っていることです。そして、先ほども言っ



たとおり、この儒教は一五〇〇年以上も昔にできたものです。それが、今を生きる私たちもやっていること、それは本当にすごいことだと思います。なぜなら、この一五〇〇年の長い間、その教えはずっと引き継がれていたということだからです。

私たちは誰から儒教の内容、人を思いやることの大切さを教えてもらったのでしょうか。それは、親や先生など周りにいる大人たちです。何か悪いことをしたら、親から注意されて、次からは気をつけようと反省したことや、人間関係がうまくいかず、先生に相談をしてアドバイスをもらったことはありませんか。私は一五〇〇年の間、このようにして人々は儒教の教え、人間の心にあるべき姿を受け継いでいったのだと思います。

そして、まさに私たちが通っている麗澤瑞浪の創立に関わった廣池千九郎先生は儒教の教えを受け継いで研究を進めた方の一人です。儒教の教えを受け継いだ廣池千九郎先生はモラロジーを提唱しました。実際 私たちはこの学校で廣池千九郎先生の教えであるモラロジーを通じて、儒教を学んでいます。

「三方よし」、これは廣池千九郎先生が説いた教えです。「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」。みなさんはこの教えを授業等で聞いたことがあると思います。この三方よしと儒教は一見あまり関係がないように思えますが、根底は一緒です。自分中心に考えない、だからといって自分を卑下するわけでもなく、皆が幸せな結果を得られるようにする、それが三方よしと儒教の共通する目的です。孔子から廣池千九郎先生に、廣池千九郎先生から私たちに、そして次は私たちがこの麗澤瑞浪で学んだことを引き継いで伝統を繋げていくことが大切でしょう。

繋げるといっても偉大な先生になって生徒に教えないとか、そういうことではありません。大事なはこの伝統を後世の人に繋ぐことです。伝統は守るだけでは意味がありません。繋いでいくものです。弟や妹、これからできるかもしれない学校や職場の後輩、自分の子どもに教えてあげる、それだけで十分だと私は思います。

そして、これは一つの例にすぎませんが、ずっと昔から今まで愛されている曲がありま

す。それは、なぜ今も愛されているのでしょうか。もちろんその曲自体が魅力的というのも理由の一つではあると思います。しかし、その魅力を伝える人がいなくては昔の曲を今の人が知る機会というのは少なくなるでしょう。しかし、「この曲を聴いて」と勧めてくれる大人がいたり、テレビで昔の名曲特集などがやっていたらどうでしょうか。それをきっかけに昔の曲を知ることが出来るかもしれません。

儒教やモラロジも一緒です。どんなにすばらしい伝統であっても勝手に繋がれていくわけではありませんから、私たちが積極的に伝えていかなくてはけません。どうせ誰かがやってくれると考えることによって、今ある伝統は少しずつ消えていってしまうかもしれません。私たちも廣池千九郎先生のようにすばらしいと思ったものを追求して、後世の人々に引き継ごうとすることが重要だと思います。

私はこの作文を書く上で、儒教やモラロジーについて調べました。正直調べてみて、なぜこんな簡単なことを難しく長々と書くのだ

ろうかと疑問に思いました。でも、よくよく考えてみれば、儒教の教えを当たり前だと思える私は、しっかりと精神伝統を受け継いでいるうちの一人と言えるのでしょうか。

受け継がれ、受け継いでいく伝統

6年 松本 伊吹

伝統と聞くとどのようなことか思い浮かんでくるでしょうか。家、地域、国、私たちの身の回りには先代を生きた人々が大切にしてきた文化、精神の伝統がたくさん残り、私たちの生きる現代まで受け継がれてきています。廣池千九郎先生は伝統を「人類が共通に大きな恩恵を受けている恩人の系列」とし、これらの恩人の系列に対して、尊敬と感謝の心を抱き、その恩恵に報いるとともに、自ら恩人の生き方を学び、実践することを「伝統報恩の原理」と呼んでいます。その中でも特に長く、そして日本国では象徴として大切にされてきた皇室の歴史について、みなさんはどれだけのことを知っているでしょうか。生まれ

育った国の伝統を守り、後世に伝えていくために私たちは皇室の歴史についてもっと学び、知る必要があると思います。

みなさんは日本の皇室は世界で唯一の単一王朝国家だと呼ばれていることをご存知でしょうか。これはご在位中の天皇陛下一二六代を含め、二七〇〇年もの間にわたって万世一系の天皇陛下が存在していることを表しています。日本の皇室は世界のなかで見ても、最も長い歴史を持っています。次に長いデンマ



ークの王室は一〇〇〇年の歴史と言われているので、その二倍以上の歴史を持っています。多くの人が大切にし、後世に受け継いでいこうと努力した結果がこうして現れているのかと思うと、私たちも引き継いで、これから先も古き良き文化を継承していく必要があるのではないのでしょうか。そのためにも今一度日本の皇室の歴史について興味を持ち、多く触れてみてほしいと思います。

日本の皇室は、万世一系、そして例外なく男系男子の血筋で今日まで繋がってきています。江戸時代の後期には一八代後桃園天皇に皇子がおられなかったために、四代遡って、閑院宮家から光格天皇が皇位を継承しているという歴史もあります。私は幼い頃からこうした皇室にまつわる話や、天皇陛下についての歴史などを親族から教わってきました。

私の高祖父、伏見宮博恭王は第二次世界大戦後に皇籍を離脱するまで、天皇陛下を支える宮家の一員として、海軍元帥で軍令部総長を務めていたこともありました。宮家には、天皇家の血筋を絶やさないという大きな役目とともに、軍人として天皇陛下をお守りする

といった大切な役目を担っていました。戦争では多くの犠牲者を出し、罪のない命もたくさん奪われました。そのような過去が良い歴史だったとは思いませんが、自らの命よりも大切にしなければならぬもの、守らなければならぬものを抱え、第一線で指揮を取り続け、終身皇族として、軍人として生きた高祖父を私はとても誇りに思います。

そのようなこともあり、私は皇室の歴史に興味を持っていました。そこで、皇室を身近に感じ、触れられる良い機会だと思い、昨年皇居勤労奉仕に参加させてもらいました。皇室の歴史についてお話を聞いたり、テレビやニュースなどで拝見したことはあっても、普段どのようなことをしてお過ごしになられているのかなど知らないことが多かったのです。新たな学びがたくさんあり、私にとって皇居勤労奉仕の参加はとても良い経験になりました。

奉仕作業中に天皇陛下からご会釈を賜る機会があり、その際は今までに味わったことがないような不思議な緊張感に襲われていました。しかし、天皇陛下がわたしたちの目の前

に現れた瞬間涙が出てきてしまいそうなほどに心が暖かくなりました。皇室が二七〇〇年もの間大切にされ、受け継がれてきた理由が少しそこでわかったような気がしました。短い時間ではありましたが、私にとって一生忘れることのできない大切な時間となりました。

また、事前学習や皇居に実際に足を踏み入れ作業をする中で、皇室や天皇陛下の歴史について多く学ぶことができました。私たちは普段、天皇陛下や皇室の歴史に触れる機会があまり多くありません。皇居で作業をさせていただいた三日間、すれ違った人の多くは外国からの観光客の方々でした。日本人として海外でも愛されている、興味が持たれている伝統ある国に生まれたことを誇りに思うと同時に、自国に二七〇〇年もの間受け継がれ、守られてきた伝統があることを日本人のみなさんにもっと知ってもらいたいなと感じました。

私たちの住む日本には、世界で一番長く大切にされてきた伝統があり、私たちはその伝統を受け継いでいく役割を担っています。これから先も後世につないで行くために、国民

一人ひとりが受け継がれてきたものを大切にしようという意識を持つことが大切なのではないでしょうか。百年先も千年先もそしてその先もずっと私たちの住む日本国が発展した国であることを願うと同時に、古くからの文化や伝統もずっと大切に受け継がれていってほしいと思います。

第二部 寮生体験発表会

【男子寮】

繋げていく

A3寮 6年 石川 太智

麗澤瑞浪に入学してから、気がつけばもう五年と半年という月日が流れた。時の経つ早さに驚くと同時に、この年月の中で自分がどれほど多くのことを学び、成長してきたのかをしみじみと感じる。入学したばかりの一年生のころを思い返すと、何もかもが新鮮で、そして少し怖かった。初めて親元を離れ、寮

での生活が始まった時、自分の力で生活をすることの難しさを痛感した。洗濯の仕方でも分からず、時間を管理することも苦手で、朝寝坊して先輩に注意されたこともあった。掃除当番の時も、どうすれば効率良く清掃できるのか分からず、慌てて周りの様子を真似していた。そんな右も左も分からない私に、一つ一つ丁寧に教えてくださったのが寮の先生方や先輩方だった。

先輩たちは決して厳しさだけでなく、温かさを持って接してくれた。失敗して落ち込んでいる時には励ましの言葉をかけ、できるようになった時には心から褒めてくれた。その姿を見て、いつか私もこんな先輩のようになりたいと心に誓った。やがて月日が経ち、今度は私が後輩に教える立場になった。最初は戸惑いもあったが、かつての私のように不安そうな顔をしている後輩に声をかけるうちに、「教える」ということの大切さを実感するようになった。私が先輩から受け取った思いやりや責任感を、今度は私が後輩に伝えていく。こうして「学び」と「支えあい」が連鎖していくことが、麗澤瑞浪の寮文化そのものな

のだと感じている。

また、寮生活を通して学んだのは、ただ生活の知恵やマナーだけではない。仲間と共に過ごす時間の中で、他者を思いやる心や、協力することの尊さを身に沁みて学んだ。時には意見が食い違い、ぶつかることもあったが、その度に話し合いを重ね、互いを理解し合うことで深まっていった。行事の準備や掃除時間など、みんなで力を合わせて取り組む時間は、私を大きく成長させてくれた。仲間との日々の積み重ねが、今の私を形づくっている



のだと思う。

先輩から私へ、そして私から後輩へ。この繋がりの中にこそ、麗澤瑞浪の伝統と精神が息づいている。私一人では到底得られなかった経験や気づきを、こうして多くの人々との関わりの中で学べたことを、心から誇りに思う。そして今、私もその「架け橋」の一部として、過去と未来を繋ぐ存在になっていることに深い喜びを感じる。何十年も前から先輩方が築き上げてきたこの文化を、今度は私たちが手で次の世代へと受け継いでいく。その積み重ねが、やがて何百年先までも続いていくのだと思うと、胸が熱くなる。

これからも私は、この麗澤瑞浪での学びと出会いを大切に、私が受け継いだ文化を磨き上げ、未来へと伝えていくことが、私に与えられた使命なのだと感じている

寮生活で学んだこと

A 8寮 5年 笹原 瑛人

私は中学から寮生活をしています。最初は

不安や緊張もありましたが、今振り返ると、寮生活を通して多くのことを学び、成長できたように思います。特に、「生活の自立」と「人間関係の築き方」、そして「自分の生活を見直す力」を学びました。

中学の寮生活では、まず基本的な生活力に身につけることから始まりました。洗濯や掃除など今まで家で親に任せていたことを自分でやらなければなりませんでした。初めは洗濯機の使い方がよく分からず、何度も先輩に確認したり、掃除をしたつもりでも先輩から「もっと丁寧」と注意されたりすることもありました。しかし、回数を重ねることに少しずつ慣れていき、今では自然とできるようなっていることも多くあります。

また、人間関係についても多く学びました。中学の寮では、数人で一つの部屋を使って生活していたので、時には、生活リズムや価値観の違いでぶつかることもありました。しかし、そこで相手の立場になって考えることや、自分の意見をきちんと伝えることの大切さを学びました。

高校に進学してからは、また違った学びが

ありました。高校の寮では一人一部屋になり、自由な時間や空間が増えたため、最初はその自由さを楽しんでいましたが、次第に部屋の整理整頓ができなくなり、気がつけば物が散らかっていることも多くなりました。中学の時は誰かに見られる環境にあったため、自然と部屋を綺麗に保とうという意識がありましたが、一人になるとその意識が薄れてしまい、床に物を置きっぱなしにしていることがありました。

この経験を通して、私は「自由には責任が伴う」ということを学びました。誰かに見られていなくても、自分の生活や行動に責任を持つことの大切さに気づきました。自分の生活を自分で整えることは簡単なようで難しく、それができるようになるためには日々の積み重ねが必要だと感じました。

寮生活では、ただ衣食住を共にするだけではなく、多くの学びや気づきがあります。親元を離れて生活することで、自分の弱さや甘えにも気づくことができ、仲間と過ごす時間の中で人との関わり方も学ぶことができました。そして、何よりも「自立することの意味」

を寮生活を通して実感することができました。これから社会に出ていく中でも、寮生活で学んだことを活かし、自分自身と向き合いながら、他者と協力し合って生きていける人間になりたいと思います。

【女子寮】

憧れから尊敬へ

B2寮 6年 平居 和花

新型コロナウイルスの影響で私たちの入寮は四月ではありませんでした。ようやく学校が再開することになった五月、兄の帰寮の関係で私は同級生より一日早くB2寮に入寮しました。周りの先輩方も帰寮したばかりで忙しく、毎年行われているお出迎えはありませんでした。母が帰り、部屋で一人であった時に、当時中学二年生だった部屋長の先輩が訪ねてきてくださり、その他の中学二年生の先輩方とトランプをしました。また、その日は先輩方と一緒に食堂や風呂にも行き、先輩方の

優しさに触れたことで寮への不安も和らぎました。

中学生のころ、私は人間関係に悩んでおり、度々ある先輩に相談していました。同じ番室になったり、話を重ねていくうちに、その先輩への信頼感は強まりました。そして、その方が後輩に対してメリハリのある接し方をしている姿を見て「私もこんな先輩になりたい」と憧れるようになりました。その方との会話の内容は今では曖昧になってしまいましたが、それでも心に残っているものがあります。

中学一年生のころから「先輩は敬いなさい」と教えられてきたため、当時は表面的に敬っているふりをしていました。それは本当の意味で「敬う」ということを理解できていなかったからでしょう。しかし、その先輩に出会い、関わり、憧れた中で自然と尊敬の念が芽生え、「敬う」とはどういうことを理解できました。

高校一年生の時、私の憧れの先輩が寮長を務める寮で過ごしました。寮長としても、受験生としても努力している姿からは「努力を継続すること」の大切さを教わった気がしま



す。ある偉人は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言いました。この言葉には続きがあり、「人は生まれながらに平等だが、その後の違いは学問に励んだか否かによって生じる」と述べています。私もまさにその通りだと思います。私たち学生の本分は勉強です。尊敬する先輩も学生として勉学に励み、今も夢に向かって努力し続けていることでしょう。

私はこれまで、先輩や家族、友人、先生方と

いった周りの人から多くの優しさを分けてもらいながら生活してきました。寮生活は辛いこともある反面、周りの優しさに触れる機会も多くありました。また、家から離れて年の比較的近い仲間と寮生活を送り、先輩方をはじめ、多くの人の頑張っている姿を見てきました。その姿を見てきたからこそ私も頑張れる、もう少し頑張ろうと思えます。これは辛い時に支えてくれた人のおかげでもあります。私を支えてくださった「みなさん」ありがとうございました。

これからも、優しさであふれる寮でみんなが素敵な日々を送れることを心から祈っています。

六年間の寮生活で変わったこと

B3寮 6年 文 美恵子

六年前、私は初めての場所で始まる新しい生活への不安や、これから始まる学校生活への期待を背負い、ここ女子寮へ入寮して来ました。親元を離れて暮らすことは初めてで、

またその当時は山口県という簡単には帰ることができない場所に住んでいたため、入寮日に両親に別れを告げた後、しばらくは家族と会えない悲しさと今後への不安で、一人部屋の中で涙をこらえていたのを今でも覚えています。

入寮して間もないころの私は、上下関係も分からず、初めての環境で厳しいルールに戸惑いながらも、早く周りに馴染もうと必死でした。また、小学生のころの自分からとにかく変わりたいという思いから、頑張って面白い人であろうとするなど、いわゆる「自分探し」をしていました。その結果、ルールを守っていなかったり、先輩方のことを考えずにうるさくしてしまったりと、ただの迷惑極まりない一年生だったと思います。しかし、その行動は誰かから面白い人だと思われるために、頑張って作っていた自分でもあったため、いつしかそれが本当の自分なのか分からなくなり、そんな自分自身が嫌になった時期もありました。

そんな私を救ってくれたのは、初めての寮替えて同じ部屋になった友人でした。彼女は

ぶれない軸を持ち、自分らしく生きている人でした。それに加えて、周りのこともよく見て行動し、寮の規則もしっかり守っており、誰からも好かれる人でした。そして、私が入寮してから初めて、素の私自身を認め、褒めてくれる人でした。そんな彼女に憧れ、私も彼女のように誰からも好かれるような人になろうと決意しました。それから、意識して寮内で私にできることを探したり、自分の明るさを強みにして、周りを元気にできる人であろうと努力しました。また、自分の行動や言葉遣いに気を配り、周りへのちょっとした心遣いを大切にするようになりました。すると、周りから頼られることや、褒められることが増えたように感じ、それに伴って自分に自信が持てるようになりました。そのころから私は、前向きに物事に取り組めるようになり、積極的に自分のやりたいことに挑戦できるようになりました。

そしてもちろん、六年間の寮生活で、たくさん喧嘩し、たくさん泣き、もう寮生活なんてやめてしまいたいと思うこともありましたが、寮は友達と物理的にも精神的にも近い環境で

の生活であるため、お互いの不満が爆発し、喧嘩に発展してしまうこともありました。また、仲良くなったからこそ、お互いへの気遣いや配慮が疎かになり、相手に嫌な思いをさせてしまうこともありました。そのような中で「言葉にして伝えなければ、相手に自分の気持ちには伝わらない」ということや「親しき仲にも礼儀あり」というように、仲が良いからこそ忘れてしまいがちな気遣いを軽視せず、お互いを大切にする必要があることを、身を持って実感することができました。

また、嫌なことがあるたびに電話越しで慰めてくれた両親の存在は、私にとってとても大きいものでした。私の両親は、私が寮生活が嫌すぎて逃げ出したいと言った際に「いつでも帰りたい時に帰ってきていいよ」と言ってくれました。この言葉に当時の私は救われました。私が六年間寮生活を送れたのも、今こうしてここに立っているのも、両親の支えがあったからこそだと思います。

私は、六年間の寮生活を通して、礼儀や感謝、思いやりの心に加えて、周りを見る力、ポジティブに考える力、挑戦力、そして自信を

身につけることができました。また、お互いのことを理解し合える一生の友達もできました。寮生活での苦い思い出は、今では笑い話となり、良い経験だったなと思えるようになりました。私は寮生活をしたことによって、人として素晴らしい成長を遂げることができたと思います。そして私にその成長のチャンスを与えてくれた仲間には、感謝してもしきれません。

いつか、皆さんも寮生活が嫌になる日が来ると 생각합니다。しかし、それを乗り越えた先の成長を経験してほしいと思っています。嫌な出来事も、全て自分の経験値として身についていきます。また、自分が配った思いやりはいつか自分に返ってきます。そして、最終的には、寮生活が良い経験だったと思える日が来ます。その日が来るまで、一日一日を大切に過ごしてほしいです。

そして、保護者の皆様、もしお子さんが寮生活がしんどいと感じている時には、甘やかしすぎずに、寄り添ってあげてください。「可愛い子には旅をさせよ」というように、家族同然の距離感だからこそ人間関係に悩みがち

な寮生活という大きな旅路の中で、多くの経験をし、その苦しさ乗り越えた子供は、きっと驚くほど成長し、強くなつて帰ってきてくれると思います。

これからは、持ち前の明るさと、寮生活を通して培った忍耐力や積極性、そして周りへの気遣いなどを活かして、目標に向かって私らしく生きていこうと思います。

【部活寮】

寮生活を通して学んだこと

テニス部寮 6年 田中 智稀

私が寮生活を通して学んだことは大きく分けて二つあります。一つ目は他者の意見に耳を傾けることの大切さです。テニス部寮には、さまざまな地域から集まって来た人たちがおり、方言も違えば価値観も違います。自分と違った価値観を持つている人がいても、その価値観を尊重する必要がありました。なぜなら、私たちは団体戦で日本一になるという共

通目標を持っており、互いの意見に耳を傾け、協力し合うことが欠かせなかったからです。

テニス部には互いの意見に耳を傾ける機会が多くありました。例えば大会前に行っていたミーティングです。そこでは、一人一人が次の大会のチーム目標と個人目標と目標を達成するためにやるべきことを発表しました。これにより、チームで目標を見つめ直すと同時に、仲間の発表を聞き新たな視点を獲得することができたと思います。

こうした傾聴力の大切さを感じた場面はミ



ーティングだけでなく、寮の中でもありました。私は三年間の寮生活を通して幅広い世代の人たちと関わってきた、多様な考えや経験を理解することの重要性を学びました。先輩方と関わる上で、自分に必要な力が分かったり、チームの良い伝統を受け継ぐことができました。先輩たちと関わる上では、自分が四年生だったころの不安や戸惑いを思い出し、同じような気持ちを抱える先輩のことを、よく考えるように意識してきました。その結果後輩の話に耳を傾ける傾聴力や、状況に応じて適切に助言する力の大切さを実感することができました。

学んだことの二つ目は、視野を広げることの必要性です。入寮するまでは自己本位の行動が多く、周りのことが見えていませんでした。しかし、寮生活を通して視野を広げ、自己本位の行動から他者からの見返りを求めない、思いやりの行動へと変えられるようになりました。この他者からの見返りを求めない思いやりの行動をすることの難しさも同時に気づきました。思いやりの行動を習慣化しようとしたことにより、見返りを求めなくなったと

思います。私は思いやりの行動とは運を貯めることだと思っており、スリッパを揃えたり、落とし物を拾うことを寮生活だけでなく、学校の道徳教育を通して習慣化することができました。

このような寮生活での経験は将来にも生きる私の大きな財産だと思います。そのため、寮生活を通して学んだことを高校三年間で終わらせず、大学に行っても、社会に出ても活かしていきたいです。

第三部 修学旅行

日台友好とは

5年1組 須藤 璃聖

修学旅行で台湾に行った際、文化や人柄、多くの違いを感じました。その中でも一番感じた日台友好の関係について私の台湾での体験を通して書こうと思います。

まず、台湾に行く前、まだ日本にいる時、「日台友好って勝手に日本が言っているだけ

じゃないの」と思っていたことがありました。道徳や歴史の授業で、日本と台湾の間にあったいろいろな出来事を知らないというわけはありません。大震災での支援の話や、八田與一さんのダム建設など、他の人より少し、台湾に詳しいと思うほどです。ならなぜ日台友好をあまり信じられなかったのか。それは、昔の話と今生きている自分とは区別して考えていたからです。例えば東日本大震災、台湾は日本に多くの支援をしてくれました。それで助かった命が多くありました。日本もです。先ほど言ったように八田與一さんの活躍があったり、台湾の将来に多く貢献しました。しかし、これは私の祖先の話です。東日本大震災も私は幼く、あまり記憶にありません。そんな昔のことお互い覚えていたのかな。いつか忘れたり、薄まったりしているのではないかな。それが台湾に行く前の私の考えでした。

台湾にいき着いた時、私は驚きました。至る所に日本語、日本の文化、キャラ。多くの物事が見てとれました。日本には台湾語がたくさんあるわけではないのであまり感じられませんでした。台湾に行くと、親日、友好とい



うのが見てとれました。そして、もう一つ驚いたことがあります。それは日本語を話せる人が多いということです。台湾の人は日本と比べると、とてもフレンドリーでたくさん話しかけてくれます。九十五歳くらいの人、七十代くらいの人、三十代くらいの人。多くの人に声をかけていただきました。しかも、日本語です。年配の方で

あるほど流暢に話してくれました。今までは資料や文章だけでしか感じられなかった歴史を、実際に体験したような気分でした。

日本にいたままであれば気づけなかったことを多く学ばせていただきました。また、過ぎてしまっても物に、人に受け継がれて、その時のお互いの感謝は次の世代に行き、友好があり、それは平和にもつながっているのだと思いました。

日本に帰った今では、台湾と友好が続くようにお互い助け合い、発展していきたいなど考えるようになりました。

台湾で感じた日本のありがたさ

5年2組 大谷 輝仁

この修学旅行を通していろいろな学びがありました。四日間の体験をした中で特に印象に残った場面は、三日目の夜の班別自由行動でした。台湾の有名な文化である夜市を班の四人のメンバーで訪れ、日本語をカタコトで喋り話しかけてくれる現地の人との会話を楽し

第四部 皇居勤勞奉仕

4年 藤 優月

みつ、順調に台湾を楽しんでいました。台湾の人は本当に優しく親切で、人懐っこいというか、とてもフレンドリーで、一回会ったことがあるような錯覚をしまうほどでした。屋台で食べものやゲームを楽しみ、もう帰ろうと夜の出口に向かって歩き始めて、駅に向かうとしたその時、私は違和感を覚ええました。夜の出口で男の人が土下座をして、頭をすつと小刻みに動かしているのです。私は最初、ふざけている人がいると思いました。でも違いました。その男の人は物乞いでした。ちょうど見回りをしていたエルマー先生に会って、あの人は何をしているのかと質問すると、先生は「He is a beggar」と教えてくれました。フィリピン出身のエルマー先生は物乞いの人を見たことがあって、普通のこのように振る舞っていましたが、私は驚きを隠すことができませんでした。他の班のメンバーも同じような反応でした。ただ、これも経験だと思い、その男の人にお金をあげようという話になりました。また、屋台で食べものを買って渡してあげようというふうにもなり、食べものとお金を渡しにきました。

すると遠くでは気づかなかったことがわかりました。その人は右手の肘から先がありませんでした。さらにそれを見て心が苦しくなりました。お金をあげると、小さいかすれそうな声でお金を言ってくれました。食べものもあげようとすると、口の中を見せてきて、自分の口を指差して食べられないことをジェスチャーで伝えてくれました。彼は歯が二本しかありませんでした。楽しかった台湾での班別行動が、この出来事によって一気に雰囲気苦しくなりました。駅まではみんなほとんど喋らずに向かいました。

この経験から私は、日本の生活保護制度などは当たり前ではなく、本当に豊かな国なのだと実感することができました。当たり前はありがたいことだと何度も学校で教えられてきましたが、このわずかに五分足らずの経験が、その言葉や授業より何倍も強く説得力があるように感じました。世界にはもっと苦しい人がたくさんいます。日本のありがたさを理解し苦しい人を救えるような大人になりたいです。

私は皇居や初日の御陵、靖国神社などに行くのも初めてだったので、学べることに、感じることも多い五日間でした。まず、初日の多摩陵・武蔵野陵には大正天皇、昭和天皇とその皇后のお墓がありました。私が思っていたよりとても大きくて、それだけ天皇は大きな存在で慕われていたのかなと思いました。靖国神社では初めての正式参拝で緊張もしましたが、いい体験になりました。その後の遊就館では、歴史の授業で習った出来事が多くの資料として残っていて、とても心に残りました。兜や鎧、刀を見たときには、驚きと感動で心が踊りました。ですが、当時の傷跡が残る服や持ち物、戦没者の写真を見ていると、胸が痛み、思わず涙が出そうになりました。戦争がどれだけ強大で恐ろしいものかをはじめて理解できた気がしました。歴史は授業だけで終わらせず、心にとめておきたいと思いました。

次の日から、皇居奉仕が始まりました。宮殿や庭園、その場所に纏わるエピソードなどを見聞きすることができて、学びになることがとても多かったです。特に宮殿東庭の大刈込は亀の形になるように切られていたり、細かい技法や込められた形が見事だと感じました。この皇居奉仕に参加し、このようなお話を聞くことができて、私は本当に幸運だと思いました。また、天皇陛下ご自身で作られている水田や皇后陛下のご養蚕の場所も見学をして、驚きました。私は今まで天皇皇后両陛下がそのようなご活動をされていることを知らなかったのも、深く感銘を受け、もっと両陛下のご活動を知りたいと思うきっかけになりました。

今回の皇居奉仕では秋篠宮ご夫妻と天皇陛下のご会釈を賜りました。今までは画面の向こうでしか見たことがなかったので実際に会いしてとても感動しました。神聖さや言葉にあらわせないようなオーラを感じ、魂が震えるような思いでした。お会いしたあとには、清掃活動でもなんでもがんばりたいというパワーややる気が湧き出てきました。秋篠

宮ご夫妻は帰られる際に何度も振り返ってお手を振っていただき、そのたびに胸が一杯になりました。

感動や心躍る出来事の多い五日間でしたが、知ったこと、感じたことすべてを忘れないよう、自身の糧にして生きていきたいです。本当にこの皇居奉仕に参加することができてよかったです。



皇居勤労奉仕記念

於：皇居富士見樓
令和7年12月25日

5年 大島 望来

私は、四日間の皇居奉仕を通して多くのことを学んだ。皇居という日本の歴史と伝統を象徴する特別な場所で奉仕活動を行うことは、参加前から大きな緊張を感じていたが、その分、一日一日を大切に過ごそうという気持ちで自然と芽生えた。普段の学校生活では意識しきれていなかった礼儀や姿勢、言葉遣いについて多く考える機会となり、自分自身を見つめ直す四日間だった。皇居では、職員の方が案内してくださったのだが、皇居の建物の説明だけではなく、皇室の方々のエピソードや皇居の歴史などを何も見ることなく説明している姿を見て、皇室の方々やその歴史への愛を感じることができた。

皇居奉仕初日、皇居に足を踏み入れた瞬間に一気に空気が変わったように感じた。日本の首都である東京のど真ん中にあるにも関わらず、そこだけ静けさと洗練された空気を強く感じた。普段は立ち入れない場所で奉仕活動をする中で、自分自身でやるべきことを考え、仲間たちと協力しあうことの大切さを学

んだ。二日目は、秋篠宮ご夫妻にご会釈を賜る機会をいただいた。皇室の方ならではの身にとまったオーラに含まれる優しさやおおらかさを近距離で感じ、場の雰囲気が一気に緊張に包まれたようだった。ご夫妻がお話しされるのを直接見たのは初めてのことだったので、今までにない緊張感を抱いた。三日目は、雨のため午後からは明治神宮に参拝することとなった。そして最終日の四日目、天皇陛下にご会釈を賜る機会をいただいた。この日は十二月二十五日で大正天皇の命日だったため、天皇陛下のご会釈の前まで大正天皇例祭と呼ばれる祭事が行われていた。

この皇居奉仕を通して、今までに経験したことのない、またこれから経験することはないであろう貴重な出来事を、高校生である今経験することができて本当に良かった。また、靖国神社や天皇陵、明治神宮に行き実際に目にしたことで、変わりゆくこの日本の中に日本の伝統や歴史がしっかりと残されていることを強く実感した。何気ない日常が、多くの人々の支えと努力によって成り立っていることに気付いた。天皇皇后両陛下や皇室の方々、

そこで働かれている方々はもちろん、皇居奉仕をできたことやそこであくさんのことを学べたことに感謝をして、学んだことをこれらの人生に活かしていきたい。

第五部 六年生 麗澤瑞浪に学んで

選択の重要性

6年1組 小島 朋高

私は麗澤瑞浪で「選択をする」ことの重要性を学びました。

私は麗澤瑞浪に六年間在籍し多くのことを経験しました。成功したこともあれば、失敗や挫折などを味わうこともありました。すべての経験の中で必ず存在するのが「選択」でした。これは進路を決めたり志望校を決めると言った選択だけでなく、自らの発言や行動といったものにも選択するという行為が行われるのです。私はこの選択で数々の失敗と後悔を経験しました。

数々の選択の中で私が最も後悔していることは、進路についてです。進学クラスで成績上位をとるという目標を掲げ、三年間必死に努力してきました。結果、三年間でほとんど順位や成績を落とすことなく過ごすことができました。しかし、高校三年生になってからそれまでしてきた選択について後悔するようになりました。「もっと早いうちから勉強しておけば」「もしも選抜クラスを選んでいれば」「自分で選択し、後悔のないように努力してきたつもりでも自分の将来を考えるとときには後悔をするようになっていました。親との約束である「自分の後悔をしないような選択をする、そして選択したことに對して後悔をしない」は守ることができませんでした。自分の行動に對して責任を持つというのは言うのは簡単であるが実行するのはこんなにも難しいことなのだと思って痛感しました。

この麗澤瑞浪での六年間は人間として成長する機会をくれた場所でした。友人と喧嘩をしたり、不適切な行動で先生方に注意されたりなど思い返せば呆れてしまうようなこともたくさんしてきました。その中で特に私は選

択の重要性について身を持って学びました。前述で述べたような選択に対する後悔ももちろんありますが、その選択もすべてを後悔しているわけでもありません。この選択をしたおかげで、今こうして友人や環境に恵まれ生活することができています。

最後に、麗澤瑞浪という環境は私にとってかけがえのない場所です。六年前の緊張した入学式の日から今日まで様々な学びを得ました。「選択すること」以外にも人間関係や社会での生き方など本当に様々です。今の私がいるのは関わってくれたすべての人達のおかげです。六年間サポートしてくれた親族、勉強以外にも相談に乗ってくれた先生方、楽しい学校生活を作ってくれた友人、すべての人に感謝をしたいと思います。麗澤瑞浪で得た学びはこの先もずっと活かすことができると考えています。この大切な六年間の学びを無駄にしないように、卒業後も感謝をしながら生きていきます。

人の幸せ

6年1組 伊藤 麗佳

私が麗澤瑞浪で学んだことは「人の幸せを考え実行すること」です。

「人の幸せを考え実行する」というのは麗澤瑞浪が目標として掲げているものです。入学当初はこの言葉に対して「人の幸せなんてその人によって違うから自分が考えても意味



ないでしょ」と不満を持っていました。しかし、三年間の生活を通して、人の幸せを願うことは「気持ち」だけでなく「行動」まで含めたものだと思えるようになりました。

そのきっかけになったのが、二年生の冬休みです。私が遊びに行くために駅に歩いて向かっている途中、おばあさんに「有名な五平餅のお店どこですか。恵那から来ていて、わからないのですが教えてくださいませんか。」と声をかけられました。私は電車が出発するまであと五分しかなく、助けようか迷いました。しかし、「ここでおばあさんを無視したら後悔する気がする。この方はわざわざ恵那からきて楽しみにしてきたんだ。」と思い、私は「大丈夫ですよ。よろしければ、お店までご案内しますよ。」と案内することにしました。それから、おばあさんの歩くスピードに合わせて、他愛のない会話をしたりしてお店まで案内しました。お店につく頃には電車の出発時刻は過ぎていましたが、おばあさんに別れ際に言われた「ありがとうね。貴方のおかげで来ることができた。本当にありがとう。」という言葉で私はとっても嬉しく幸せな気持ち

になりました。その時私は「人の幸せを考え実行するということは自分も相手も心が幸せな気持ちになる。」と感じました。もちろん人によつて幸せは異なります。しかし、「相手の幸せを考え実行する」ことは相手も自分も幸せだと感じるができます。

それ以来私は、学校生活や日常生活で「今これをしたら、この子が楽になるかな。」「困っているから手伝つてあげよう。」と、周りを見て相手の状況を考え、自分で判断し行動するように努めました。小さなことでも、自分の行動が誰かの気持ちを軽くしたり笑顔につながったりすると分かると、行動することが次第に自然になっていきました。また「人の幸せを考え実行する。」ことは自分の気持ちも前向きになり、周りとの関係も豊かにするということも学びました。

自分らしさ

6年3組 鈴木 良研

私が麗澤瑞浪で学んだことは今を楽しむこ

とです。

私は昔から夏休みの宿題などは最終日まで残してしまうのが当たり前のような計画性のない人間でした。昔はそんな自分を好きになれず計画性を持つて行動している人を羨ましがっていました。しかし麗澤瑞浪での生活を通して、少しずつ自分がどんな人なのかを理解するようになりました。

ある日の道徳の授業で、ポジティブシンキングについて学ぶ機会がありました。そこで私は、これまでの計画性のない自分をあまり好きに思えなかったけれど、振り返ってみればその時その時を全力で生きていたのだと思いました。部活の試合前は、試合に勝つために必死に練習していたし、文化祭でダンスを踊るときは、未経験だったけれどダンスを成功させるためにメンバーと協力して練習し、成功を目指しました。六年生での陸上競技会では、受験生だったけれどその期間は陸上競技会に全力を注ぎ優勝することができました。また、クラスの日直でスピーチをするときは、原稿を読むのではなく、その場で思ったことを自分の言葉で話すようにしていました。と

きには変なことを言ってしまうこともありましたが、それを恥ずかしいと感じたことは一度もなく、むしろ楽しんで話す自分がいました。今では計画性を持つて行動する人を羨むのではなく、「今を楽しむ」「未来のために努力する」など生き方は人それぞれでいいのだと思えるようになりました。

人の考え方は三者三様でそれぞれ違うと思います。よく私は「後悔のない選択をするようにね」と言われることがありますが、過去の選択は変えられないけれど、自分次第でその選択を正解にすることはできると思います。私はこれから数え切れないほどの人生の選択をしていくと思いますが、自分がした選択に自信を持つて今を全力で楽しんで生きたいと思います。今の自分があるのは麗澤瑞浪に入り、温かい心に触れ、素晴らしい環境で育ったからだと思います。これまで私を支えてくれた方々への感謝を忘れず、これからまわりの人への感謝の気持ちを大切にしながら、自分らしく前向きな気持ちで生きていきたいです。

第六部 卒業生答辞



卒業生代表 大島 麗未

春の暖かな日差しに包まれ、園内の桜が芽吹き始める今日、私たちは卒業の日を迎えました。このよき日に、私たち卒業生のために盛大な卒業証書授与式を挙行していただき、心より感謝申し上げます。理事長先生をはじめ、校長先生、来賓の方々、在校生からの温かい励ましのお言葉は私たちの背中を押してくれるようで、胸が熱くなりました。本当にありがとうございました。

私が麗澤瑞浪に入学した二〇二〇年は、新型コロナウイルスが蔓延し、緊急事態宣言が発令されている最中でした。入学式は制限された形で行われ、オンライン授業が続いたため、なかなか学校に通うことができませんで

した。クラスで初めて友達と顔を合わせたのは、六月に入ってからのことです。楽しみにしていた学校行事は次々と中止となり、寮生活においても多くの制限が課せられました。こんな生活がいつまで続くのか、不安を抱えていたことを覚えています。

このように始まった中学校生活だったからこそ、「友達の大切さ」を強く感じる事ができました。制限された生活の中でも、楽しいことを見つけ、笑い合うことができたのは二十四時間友達という存在が近くにくれていたからでした。しかし、私の親友が学校を辞め、孤独を感じていた時期がありました。そのとき、いつも一緒にいて笑い合ったり、時には喧嘩をしていた日々でさえも、あたりまえではなかったということに気付かされました。

また、高校に入学してから、私が初めての大きな手術を経験した時に、支えてくれたのは家族だけでなく多くの友達の存在でした。病室で孤独や不安を感じている時、ビデオメッセージやメールを送ってくれたり、お見舞いに来てくれたりと、その一つ一つが大きな支えとなりました。

このように友達に支えられてきたのはきつと私だけではないはずです。三年間、または六年間この麗澤瑞浪で生活してきたみんなが、友達の存在に助けられてきたと思います。

麗澤瑞浪で学んだ「自立」「感謝」「思いやり」の心は、そのようなかけがえない友達との過ごした日々の中から得ることができたのだと思います。

私は麗澤瑞浪で、寮生活だけでなく学校生活でも何事にも挑戦できる環境に恵まれていたと感じています。生徒会や寮役員としての活動に加え、留学や探究活動など、さまざまな経験をする事ができました。これらの経験を通して、相手としっかりと向き合い、コミュニケーションを取ることや、挑戦する姿勢が大切であることを学びました。うまくいかないことや失敗もたくさん経験しましたが、それを恩寵的試練と考え、自分の成長の機会だと捉えられるようになりました。

今思い返すと、高校三年間はあつという間でしたが、数え切れないほどの素晴らしい出会いや経験がありました。一生懸命練習を重ね、思うような結果が出なくても、みんな

励まし合った陸上競技会。最高のものにしよう、全校生徒を引っ張りながら、それぞれが自分の役割を全うし、試行錯誤を重ねて作り上げた麗明祭。谷川研修をはじめ、多くの人にとって初めての海外となった台湾修学旅行や伊勢参拝などの学年行事。これらの経験を通して、学年全体の絆は深まり、より充実した日々を過ごすことができました。

私は中学生の頃、反抗期で両親への感謝を言葉にすることが恥ずかしく、素直に伝えることができませんでした。ですが、この六年間の学びで、今では「ありがとう」を自然と言葉にできるようになりました。そのきっかけの一つが寮生活です。親元を離れて生活したことで、困ったときにいつもそばで助けてくれていた両親の存在の大きさに気づくことができ、その存在の有り難さを実感しました。「ありがとう」の言葉には、お互いの心を温かくさせ、人を笑顔にする力があります。これから麗澤で学んだ、感謝の心を忘れずに生活していきます。

この場をお借りして、卒業生を代表し、私たちを支えてくださった皆様に、改めて感謝

の言葉を述べさせていただきます。

まず、保護者の皆さま、私たちが迷い、悩んだ時にも、信じて支えてくださり、本当にありがとうございました。これからも私たちの成長を温かく見守ってください。

また、先生方は、私たちを決して見放すことなく、正しい道へと導いてくださいました。私たちは多くの場面で迷い、たくさんのご迷



惑をおかけしたことを思います。それでも一人一人と真剣に向き合い、私たちの進路や将来について親身に寄り添って考えてくださった先生方の存在は、私たちにとって大きな支えでした。心より感謝申し上げます。

そして、同級生のみなさん。支え合い、励まし合いながら過ごした日々は、かけがえのない宝物です。本当にありがとう。これまで共に過ごしてきた仲間との別れはとても寂しいですが、また会える日を楽しみにして、これからの人生を歩んでいきましょう。

最後に後輩のみなさん、麗澤瑞浪の良き伝統を引き継ぎ、さらに素敵な場所にしてくれることを、心から期待しています。

私たちは今日ここを旅立ち、それぞれの未来へと歩み出します。今後、困難に直面しても、麗澤で学んだ誇りと感謝の心を胸に進んでまいります。最後になりましたが、理事長先生をはじめ、校長先生、教職員の皆様のご健康とご活躍、そして母校のさらなる発展をお祈りすると共に、全ての方々に感謝の気持ちを込めて答辞とさせていただきます。